氏　名

**現代文　試験問題**

問題

次の文章は、遠藤周作の小説『肉親再会』の一節で、主人公の「私」が七年ぶりに妹に会いにパリを訪れた場面である。これを読んで、後の問い（問一～六）に答えよ。

あつい(注１)ショコラを飲みほすと私はをおりて、中世美術館のの前に出る。やの金色の落葉が芝生にちらばって、子供たちが小鳥にをやっている。今どきの時刻には館内にほとんど人影のないことは昔の経験で知っている。

色をはめこんだ窓から晩秋の微光がれて、館内には二、三人の番人が隅に腰をかけているほか、も訪れてはいない。私はリルケが(注２)｢マルテの手記」で描写したゴブラン織りの一角獣を眺める。それから十二、三世紀に作られた幾つものふるい聖人像の前に立ちどまり、私は、く私がった大切なものの一つの前に進むのだ。Ａ私が喪った大切なものの一つ。誰が作ったのかわからない木彫のの死顔。脂汗と苦しみとがんでいる残酷な額。が突き出て鼻の肉もそげている。唇は残った気力まで消耗しつくしている。いくら書いても書きたりないが、ただこの丸い木の塊からなにかを射るような光が発しているのだ。

七年前、幾度もここに足を運んでこの木彫のように眼を射る光の発するものを自分もりたいと思った。だが日本に戻り家庭を持つと、生活のためにこの光への執着を少しずつ失ってしまったような気がする。その代償として今、身につけている真新しい(注３)トゥイードのコートまで作れるような余裕ある金を得ることができたのである。私はあの時、自分の片半分のきに耳をいで、もう一つの (ア)安易な声を聞いたことを心の隅でいつも恥ずかしく思っている。

空は曇っていたが、それと同じように少しな気持ちで私は美術館を出た。屋でつよいいのする煙草の箱を買い、それをふかしながら今度は少し当てもなく河岸にそって歩きはじめた。

岸の石の手すりに手をかけていると妹の部屋を尋ねてみようかという気がふと胸のなかに起こった。咋夜もそうだったが今朝も彼女は私が彼女の下宿をたずねるのをなぜか避けているような気がした。あいつにはひょっとすると男がいるのかもしれぬという怪しい疑惑が私の頭をかすめた。二十数歳にもなる女なのだから恋人の一人ぐらい存在しても不思議ではないのに、いざ自分の妹のこととなるとこの想像は理由もなく不愉快だった。彼女が昨夜、タクシーのなかで煙草をっているのを見た時と同じような嫌な感じがこみあげてきたのである。

地下鉄を一つ乗りかえて私は(注４)コンコルドまで引きかえした。妹が住んでいる家はＭ……という人の家で、日本に送ってくる彼女の手紙にはいつもこの家庭が親身も及ばぬほど親切であることを書きつらねていた。そして彼女の部屋の窓からは河や革命広場を見ることができるのだとのべてあった。

で家を探すのはそんなに難しくない。道をはさんで奇数番号の家が片側に偶数番号の家がもう一方の側に並んでいるからだ。私はＭ氏のあかるい家の前にたって、すこしためらったが、思いきって呼び鈴を押すと、門番らしい老婆がなにかを食べながら出てきた。

老婆は妹の名を告げた私に、口を動かしながらよごれた手で建物の裏を指さした。はじめはその意味がよくみこめず聞きかえすと彼女は日本人の娘は裏の入口から入った六階に住んでいるのだと答えた。

建物の裏口にまわると下水がこわれているのか地面がれている。その濡れた地面にはやの皮がらしくちらばっていた。裏口は洞穴のように暗く、安ものの脂のいがこもっていて、私がそこから狭い階段を登ろうとすると、黒人の男が出て来て、昇降台を利用しろと教えてくれた。

昇降台は人を乗せるためというよりは階上に荷物を運んだり、階下にをおろすためのものらしい。油のきれたロープがんだ音をたてるのを耳にしながら私はゆっくりと六階に運ばれた。

六階の廊下につくと子供の大きな泣き声がきこえた。のような部屋が幾つか並んでいて、部屋のかげから大きな体をもった黒人の女が顔をだした。子供の泣き声はここからひびいてくる。沢山の下着が壁の両端にむすんだ綱に干してある。

私は一つの扉の前に立って、ぼんやりとそこにりつけてある妹の名札を眺めていた。黒人の女が出てきて、私の言葉を聞くとを持ってきてくれた。

妹の部屋は暗く、寒く、小さかった。これは巴里でもっとも貧しい人々が住む屋根裏部屋にちがいなかった。ニスのげた古い洋服ダンスが一つ、鉄製のベッドが一つ。小さな窓の硝子にがはいって、そこに妹が日本の千代紙を丸くきって貼っているのがあわれだった。私はしばらく固いベッドの上に腰をかけてペンキこそ塗ってあるが天井を走る幾つもの鉄管をじっと見あげて、

Ｂ(要するに……こんなものだったんだな)

といた。洋服ダンスに手をかけるとんだ音をたてて扉があいた。掛けてある洋服はどれも見おぼえがある。みな五年前に日本にいた、作った古いものばかりだ。内側の棚に二枚の写真をおいてある。一枚は彼女自身のもの。そしてもう一枚は私たち夫婦と私の息子の写真である。その写真の上に妹は折り紙のをぶらさげている。

部屋の扉をしめると私はをしのばせて廊下に出た。黒人の女はまだ両手を腰にあてて監視でもするようにこっちをいていた。

六時に(注５)モンパルナスの(注６)キャフェで彼女を待った。この時刻、キャフェのなかは満員で、異様な髪をした少女やのようなを着て、をはやした青年たちが店の中を右往左往している。煙草の煙がとたちこめ色々な国の言葉が耳に飛びこんでくる。どれもこれも自分を芸術家だと信じこんでいる連中ばかりなのだ。私は七年前も今も巴里に (イ)たむろする無数のこういう連中をし、だと考えている。もちろんその中には真剣なもいる。しかし真剣だからといってこの残酷な世界だけはどうにもなるものではない。だれもがあの中世美術館の基督の死顔のような光のつらぬくものを創れはしない。巴里ではその連中は年をとり、くたびれ、老いた獣のように敗残者となる。

（じゃ、お前はどうだ）私はマルティーニ酒を口にふくみながら自分自身にたずねた。唇から色の酒が私の着ているトゥイードのコートに少しこぼれた。私は妹の部屋にぶらさがっていた古い洋服を思いだす。（お前は敗残者にならないために日本に戻っただけじゃないか。安易な仕事ばかりしてこのコートを買う金をかせぐだけじゃないか）

人いきれで曇ったキャフェの硝子戸をそっと押す妹の体がみえた。昨夜と同じように水玉のスカーフを首に巻いてレインコートを着ている。彼女になにを飲むかときくと、サンザノ酒がいいわと答えた。お前、顔色がわるいなと私は言った。

「元気なんだけどな。今日、タイプを沢山うちすぎたから疲れたのかもしれないわ」

妹は日本にいる時からタイプは素晴らしく早く打てた。昨夜はあまり気にもとめなかった彼女の服装を、私は注意ぶかく観察する。女学生のようなをした彼女がきちんと横むきにそろえた細長い脚はどこか冷たそうだった。明日この子の自尊心を傷つけぬ口実をつけて襟巻でも買ってやりたいと思った。

「一日、あたしがいなくても面白かった？」

「ああ、あちこち歩きまわったり地下鉄に乗ったり、すっかり(注７)だな」私はそこで口をんだがどうせ、わかることだったから、

「君の下宿によったよ」

妹は黙っていた。

「さ、考えたんだけど、君、日本に帰る気はないか」

「なぜ」

「なぜって、まあ随分ながくこちらに居たじゃないか。もう充分だろう」

「まだ、やりたいことをやりかけだわ。先生だってこれからだと言ってくださるんだもの」

「誰だ、その先生ってのは」

「レーベジェフさんよ。昨日、話したじゃない」妹は今度は怒ったように言った。「マリニイ座で先月も出た一流の俳優よ。日本人で彼に教えて頂いているのは私一人よ」

Ｃ私は思わず、自分たちの周囲をもう一度みまわした。相変わらず異様な髪の形をした女や、肋骨のような外套を着た男たちが幾十人もキャフェのなかを右往左往していた。これらは屑だ。どれもこれも巴里のなかで自分だけは才能があると思い、沈んでいく連中だ。妹も今、この異国の都会でその一人になろうとしている。

「でも、こんな連中みたいになったらおいじゃないか」

私は自分のトゥイードのコートに眼を落とした。だが妹は負けずに、

「たとえ、そうなったって……生きることって結果ではないじゃないの、 (ウ)償われなくったって自分がいいならそれで結構じゃないの」

「だがな、この連中を見ろよ。惨めだと思わないかい」

この街にまで来て妹と争いたくはない。ただ、これら男女が、しゃべったり、懸命になったり誠実に生きても、芸術の残酷な世界では立派なものを生むとは限らないと妹に言ってやりたかったのである。だが言葉はうまく口からは出ずにそれは別の結果を彼女に及ぼしたらしい。

「わかったわ」妹はまばたきもせず黒い大きな眼で私をみつめて、「だから(注８)ポーちゃんは日本に帰ったんでしょう。ポーちゃんはなにか報われなければ嫌だったんでしょう」

「よそうよ。するのは」

私は勘定書を手にとった。Ｄ妹の言っていることは半分は正しい。七年前、私の片半分は安易さを捨てろ、もっともっとこの街に一人でまるべきだと囁いていた。それに耳を塞いだ私はあの中世美術館の基督の死顔を喪い、そのかわりこのトゥイードのコートをえた。

（注） １ ショコラ――チョコレート飲料。

２ ｢マルテの手記」――オーストリアの文学者リルケの小説。

３ トゥイード――毛織物の一種。 ４ コンコルド――パリの広場の名。

５ モンパルナス――パリの一地区の名。 ６ キャフェ――カフェのこと。

７ 赤毛布――不慣れな旅行者のこと。 ８ ポーちゃん――妹が「私」に付けた愛称。

問一 傍線部(ア)～(ウ)の表現の本文中における意味内容として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

① 神経をすり減らす厳しい作業に嫌気がさした

② 芸術家を気取りたいという一時の誘惑に負けた

 (ア) 安易な声を聞いた ③ 気楽な仕事への言葉巧みな勧誘に従った

④ 困難を避けて生活者としての道をとった

⑤ その時々の都合のよい解釈で自分を力づけた

① 芸術家になった気分に浸っている

② 自分の夢を求め群れ集まっている

 (イ) たむろする ③ チャンスを求めてうろついている

④ 身勝手な芸術論を言い合っている

⑤ 雑談にふけってすわり込んでいる

① 努力に見合う満足感が得られなくても

② 支出に見合う収入が得られなくても

 (ウ) 償われなくったって ③ 犠牲に見合う感謝が得られなくても

④ 意気込みに見合う答えが得られなくても

⑤ 苦労に見合う成果が得られなくても

問二 傍線部Ａ「私が喪った大切なものの一つ。誰か作ったのかわからない木彫の基督の死顔」とあるが、「木彫の基督の死顔」を「喪った」とは、ここではどのようなことを意味しているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 真の芸術を創作することで人々の困窮を救おうとする心を喪ったこと。

② 古典的な作品を否定し新しい芸術を開拓しようとする心を喪ったこと。

③ ｢私」の中に光がひそんでいるという信念を持ち続ける心を喪ったこと。

④ 人の魂を激しく揺さぶるような芸術の創造を希求する心を喪ったこと。

⑤ 光を放つ芸術を創り社会的栄誉を手に入れようとする心を喪ったこと。

問三 傍線部Ｂ「（要するに……こんなものだったんだな）」とあるが、ここから「私」の妹に対するどのような心情が読みとれるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 手紙の内容から妹が満ち足りた暮らしをしていると想像していたわけではないが、実態を目の当たりにして、夢の実現を目指して貧しい生活をしている彼女を痛ましく思っている。

② 妹が家族にまで虚勢を張っていたと知って不愉快になる一方で、貧しい生活ぶりが現れている部屋を実際に見て、自分が断念した生き方を実践している彼女をねたましくも思っている。

③ 手紙の内容から妹の生活に関して安心感を抱いていたのだが、実際に貧しい生活をしている彼女の様子を見て、兄の自分だけにはもっと素直に頼ってほしかったと、残念に思っている。

④ 妹の芸術家を気取った部屋と不潔な環境を見て予想したとおりだと思ったが、貧しい生活をすることが芸術家の条件であると彼女が考えていることがわかり、情けなく思っている。

⑤ 妹が貧しい生活に耐え暮らしている中で日本や家族に対して強い愛着を抱いていることに改めて気づき、彼女はこんなにも日木に帰りたがっていたのかと、かわいそうに思っている。

問四 傍線部Ｃ「私は思わず、自分たちの周囲をもう一度みまわした」とあるが、なぜこのような態度を「私」はとったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 日本に帰らずパリでやりたいことをやると一人よがりに自己主張する妹は、キャフェに出入りしていくうち次第に自尊心が傷つけられし、破滅的な行動をしている人々と同じではないかと感じたから。

② 突然怒りをわにした妹の姿は芸術に行き詰まった焦りの結果であり、この苦悩の状態の中で信念を貫き通すことができず、自信に満ちあふれた人々の中で脱落するのではないかと感じたから。

③ 先生という権威を借りて自分には才能があることを認めさせようとする妹の姿は、異様な恰好をするなどして、芸術家としての才能があるかのようにふるまう人々と同じではないかと感じたから。

④ 先生である外国人俳優は妹を有望な芸術家志望の若者ととらえており、彼に教わることで俳優になれると信じている彼女は、一流という世俗的な芸術観を重視している人間と同じではないかと感じたから。

⑤ 自己の才能に自信を失っている妹を怒らせ大声を出させてしまったので、一流の俳優になるには今の環境では不可能だという残酷な真実を伝える前に、少し間をおく必要があるのではないかと感じたから。

問五 傍線部Ｄ「妹の言っていることは半分は正しい」とあるが、なぜ「私」は「半分は正しい」と考えているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 妹の発言は、芸術家は生活が安定すると優れた作品を創作できないとする点で未熟な芸術観だと思ったが、パリでの生活苦から逃れるために日本に戻ったというのが本心であることは明らかだから。

② 妹の発言は、「私」が世俗的な評価を得なければ満足できない人間だとする点で表面的な見方だと思ったが、芸術の理想を追い求めることをやめて帰国したという事実は認めざるを得ないから。

③ 妹の発言は、「私」がパリに未練を残したまましぶしぶ帰国したとする点で勝手な推測だと思ったが、帰国した自分が現在の安定した生活に心から満足しているわけではないのは確かだから。

④ 妹の発言は、「私」が誘惑に弱く芸術より生活を優先したとする点で一方的な決め付けだと思ったが、芸術を極めることの困難に負けたことを帰国の理由とする妹の指摘だけは的を射ているから。

⑤ 妹の発言は、芸術家は自己満足が究極の目的であるとする点で浅薄な見解だと思ったが、自分の帰国の原因は好き勝手にふるまう芸術家に対する嫌悪感にあると妹が考えているのは納得できるから。

問六 本文において「私」が考える芸術の世界とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 自分には素晴らしい資質があると自負している場合にも、情熱がともなわないと創作を続けることは困難であり、芸術のために生活を犠牲にして惜しまない者だけが生き残る世界である。

② たとえ人の目を引くような独創的な作品を創る技能と才能にめぐまれているとしても、伝統につちかわれた技能の習得も必要とされ、過酷な修業の中で個性がすり減らされていく世界である。

③ 異様な恰好が自己表現として評価されるような特殊な価値観が必要であり、創作に対する誠実さと忍耐力を発揮したとしても、特異な個性を持っていない限り惨めな敗残者になる世界である。

④ 多くの者が自己の才能を信じて優れた芸術の創造を目指すが、彼らの意欲や誠意にはかかわりなく、特別な才能と機会にめぐまれたごく少数の者だけが到達することのできる世界である。

⑤ たとえ地位や名誉を求めることなく虚心に創作し、満足できる作品を創り得たとしても、評価を下すのは最終的には他人であり、多くの場合は世に理解されず無残に捨て去られる世界である。

※ 遠藤周作「肉親再会」（『遠藤周作文学全集』７巻所収。初出は『群像』一九六一年一月号）のほぼ中間部の一節。

 【解答】

問題一

【要旨】 木彫の基督の死顔は、私が喪った大切なものの一つとして、眼を射るような光を発していた。

自分も、このようなものを創りたかったが、それに耳を塞いで、安易な声を聞いてしまっていた。妹と会ったキャフェでは、そのような光を創れない敗残者ばかりがいて、自分を芸術家だと信じこんでいた。妹もその一人になろうとしていた。以前、私の片半分は、同様に囁いていた。後日、それに耳を塞いだ私は、基督の死顔を喪った。

【解答】 【問一】　（ア）＝④　（イ）＝②　（ウ）＝⑤　【問二】　④　【問三】　①　【問四】　③　【問五】　②　【問六】　④